

美しい(善美な)人論考 — 教育思想史研究ノートから —

川瀬 八洲夫
(平成16年9月30日受理)

A Study of The Theory of A Good and Beautiful Man — Concerning in The Note of The Historical Study of The Educational Thought —

KAWASE, Yasuo

(Received on September 30, 2004)

キーワード：徳，知，人間的体験，全一的(人間)，自己意識。

Key words: virtue, intelligence, humane experience, identity, consciousness of self

プロローグ

さまざまな危機的体験を通して、「人間とは何者か?」(Who is man?)を問うたのはフロム(E.Fromm)であった。彼はその体験を基に「破壊」([The Anatomy of Human Destructiveness])「疑惑と行動」([Beyond The Chains of Illusion])「希望の革命」([The Revolution of Hope])など多くの人間学・心理学・社会学・哲学的著作を通して人間や人間の世界を分析した。彼は、人間についてを、生物的起源からく人間。その人間性の性格。また文化的・社会的条件としての人間性。人間を動機づける情熱・人間の理性・人間の体験などをあらゆる角度から論じたのである。

フロムは大学で心理学・法学・社会学などを学び、のち社会科学で世界で知られたフランクフルト学派(Frankfurter Schule)に属し、ホルクハイマー(M. Horkheimer), アドルノ(T.W. Adorno), ベンヤミン(W. Benjamin), マルクーゼ(H. Marcuse), ノイマン(J.V. Neumann)らと共にファシズムとその社会心理的基盤の総合的研究で多くの成果をあげていた。彼はナチズム、マッカーシズムなどの狂気の社会を通して、人間の持つ「破壊性」の考察を中心に、人間性の正・負の諸要件を、社会・心理・精神分析的手法を通して多面的・多角的に分析したのである。

彼はドイツ(ドイツ・ナチス・ユダヤ等)アメリカ

(ヒューマニズム・自由・民主主義・マッカーシズム等)メキシコ(メスデイツー白人・インディオ混血・社会革命・改良・自由メキシコ文化等)スイス(平和・自由・民主主義等)など複雑多様な文化・社会・国家・人間を体験し、人間性の何たるかへの飽くなき関心を広げ、その考察・追求を進め、心理・社会・人間・精神分析学的視点から彼の鋭い人間論を展開させたのである。

これまでの人間論についての研究は、伝統的な哲学(人間学、教育学もふくめて)や心理学、社会学などが中心的役割を果たしていたが、20世紀後半以降、人間への探求は人間科学、人間関係学、医学・生理学などの研究とあいまって新たな、大きな発展・展開をみせている。

さて、いま時代的進展と共にシビアナ課題として、21世紀的諸問題—いわゆる少子高齢・核家族化、人間—健康・福祉、高度情報化社会とITリテラシー、国際化・グローバル化、自由化・市場原理などシリアスな課題—人間が心身共に健康に生きぬくための諸課題がクローズアップされている。それらを適切に解決していかなければうまく生き抜けない事態に直面している。

ここでは、現代社会に広範にそして構造的に浸透・広がっている新しい人間破壊(現代的特質であるIT、ITリテラシーと科学技術の更なる発展、富・物質的欲望の肥大化、新たなナルシズム、ネクロフィリアの助成と発展等—官・民—文化・社会—地域・家庭—家族・友人などなど、また各レベルに亘っているいじめ・逸脱・犯

罪、個人—社会、軽—重の)が増大している。いま、これらに対し、法・法制・心理・教育・学校などで、どう対処していくかが真剣に問われている。重大な課題というべきであろう。人間の発達・教育の視点から人間性・人格形成の—そしてシリアスな課題として重いテーマではあるが美しい(善美な)人間—人格形成の課題を考えてみたい。またいまの高度情報化社会・産業社会・自由市場化・官僚制社会などをベースにした複雑多岐な現代の社会と人間(性)に関わって、このような現代を生きる人間にとって、人間的・善美に生き抜く指標とは何か、を探ってみたい。

1. 課題としての人間論—原初的課題

近代思想(社会、政治、人間、教育などに関わる)形成の立て役者であり、問題提起者で、あの「人間不平等起源論」([Discours Sur L'origine de L'inegalite' Parmi Les Hommes]), 「社会契約論」([Du Contrat Social]), 「エミール」([E'mile ou D'education])思想の形成者・ルソー(J.J,Rousseau)は、<人間とは何者か>の問いから彼のあらゆる思想の形成をはじめた。

ルソーは主張した。語らなければならないのは人間そのものであると、彼は、人類に二種類の不平等があるという。一つは自然の不平等であり、他は人為的不平等である。自然の不平等は、自然によって確立された年齢、健康、体力、精神あるいは魂の質である。いっぽう人為的不平等は、倫理的あるいは政治的不平等である。人為的特権者は、種々の特権を享受し、多くの特権を持っている。その人たちは、多種・多面的な特権の享受をしている。しかし、そもそも人間の本来の自然の姿とは何であったのか、長期に亘る、数々の質的・量的な歴史の変容のなかで、人間は自己の墮落の道を歩み始めたのであるという。何故か、どうしてなのか¹⁾。

ルソーは論ずる。人間のあらゆる知識のなかで最も有益であるが最も進んでいないものは人間に関する知識である。デルポイ(ギリシャ—Delphoi)の神殿の銘文だけでもモラリストのどのような大きな本より重要で難しい教えを含んでいると論じた²⁾。ルソーはディジョン(フランス—Dijon)の懸賞論文をもって一躍歴史の舞台に登場した。そして人間の不平等の起源論、不平等の歴史、人間とは何者か を自然主義思想、自然法思想の観点からラジカルに論じたのである。彼は、人間—子ども・教育—国家・社会—ナショナリズム—ヒューマニ

ム論など多彩な思想を展開をさせたのである。

さて現代教育の本質的問題として、先のフロムは教育とヒューマニズムの現代を説いていた。彼は現代社会の特徴はネクロフィリア(その性格の特徴は否定と破壊、支配と管理、分散と衰退のサイクルである)助成の社会的条件が満ち溢れ、高度の機械・技術、テクノロジーの支配する時代的特徴を有している。現代の人間・教育の知識や知性はもう、一つの頂点に達している。しかしその反面—人間の理性・判断・信念は低下し、貧弱化している。現代求められているヒューマニズムはいろいろな思想的概念を超えて人間経験、人間的現実を尊重することである。人間性の十分なる発達への関心と人間の精神的死からも人間を救うことへの関心であると、彼は、人間—人間性・人格形成への視点として 特別の意味合いを込めての「人間的体験」「人間的な希望・信念」「理性」「人間的愛」などを強調する³⁾。

ところで、本来的にヒューマニズム—人間・人間性—知と徳—善悪などの根元的課題はどう考えられてきたのであろうか。近・現代の西欧思想・哲学の基底であり、その生成の根源であったギリシャ哲学の理念において、知—徳—教養—教育の基底的思想はいかなるものであったろうか。総じて彼らの哲学・思想の特質には、知—徳(アレテ—arete)—善美論—イデア論などがあり、それは人間性、人間存在の本質論でもあったのである。

このようななかで美しい(善美な)人論が論じられたのであるが、それはどのように考えられてきたのであろうか。

2. 美しい(善美な)人論の基底

美しい(善美な)人とは何か、どのような人のことなのか? このことについてギリシャ哲学の奔流のなかで、特にプラトン(Platon)を軸にプロタゴラス(Protagoras)、ソクラテス(Socrates)、イソクラテス(Isokrates)などの論、思想にその議論・展開がみられる。ギリシャ哲学を代表するプラトンの「プロタゴラス」([Protagoras])のなかで、最高の知をそなえたものがより美しく見えると論じられる。そして、この知—最高の知とは何ぞやと吟味される。その結果、知は徳であるとされるのである。もともと人間とは一人の例外もなく必ずや何らかのかたちで徳を分け持っている存在であるとされる。人間における徳—その吟味されて、行き着くところの徳の世界とは、つまりは—正義、節制、敬虔などであり、これは人

間が人間として持つべき、持たねばならない徳ではないのかとされるのである⁴⁾。

ギリシャにおける一般教養・教育は徳を目指しての教育(paideia)とされている。この「徳を目指しての教育」における徳(アレテー-arete)とは、もともとの本来の意味は人間に固有な優秀性、卓越性すなわち人間としての性能、善さであり、あとう限りの性能の善さであり、これを伸張させることこそがギリシャにおける教育であった⁵⁾。

徳を持つことは「魂(こころ)をすぐれた善いものにする事」であり、人間のうちの真に人間であるところのもの、自己自身、本来の自己なのである⁶⁾。

この人間としての善さ、性能としての徳-思慮・節制・勇気・正義-は、つまりは<慎みの心>、<礼法を重んずる心に集約される>を意味していた。人間としての、人間に固有の善さ(徳)を涵養すること、人間としての徳の完成。この徳-「徳を持つこと」は「魂(心・精神)」をすぐれた善いものにする事である。

人間としての善さ、徳を持つ人、「有徳の士」としての「美しく善き人」はギリシャ人の人間教育の普遍的理想型であった。人間固有の善さが徳であり、その徳は知恵、節制、勇気、正義の四つに収斂されていた⁷⁾。

さてこの徳とは

1. 知恵(思慮) - まことの深慮である。これはすぐれた考慮を意味し、すぐれた考慮の能力を持つことである。無知ではなく、深慮をもたらす真性の知識を持つことである。

2. 節制 - ある種の、一種の秩序を意味している。自己に内在する、さまざまな快楽や欲望の制御であり、己れに克つことを意味している。内なる魂のすぐれた本性を持つものが劣ったものを制御すること。このことによって調和と秩序をもたらすことである。

3. 勇気 - あることの保持である。これは法により、また教育を通して形成された適正な考えの保持を可能にすることである。あらゆる危険や邪悪などを超えて、正しい法にかなった適正な考えをあらゆる場合を通じて保持することを意味している。

4. 正義 - 知恵・節制・勇気の三つに力をあたえるものとしての、他人のものでない自分自身のものとしての考え、世界を持つことである

こうした徳、そして究極の最もすぐれた徳を身につけるためのアイデア論(真のアイデア、善のアイデア)が論じら

れた。このようななかでの最高のものが善の実相(イデア)であり、これこそが学ぶべき最大のものになるのである⁸⁾。

さて「ソピステス」で語られる魂に関する教育・教養とその対処法は

(a) 悪徳---魂の病気・内乱である ---懲戒の技術

(b) 無知---魂の醜さである ---享受する技術

内乱---無知の無知

醜さ---思慮をともなわない忍耐心

ア. 無知---単純な無知---職人の専門技術

--- 無知の無知---教養(パイデア)

教育内容は ムシケー(音楽・詩・造形

体育などを含む教養)

イ. 教養---訓戒

論ばく・吟味(エレンコス)

などである⁹⁾。

このようにギリシャにおける-思想・哲学・教養・教育に求められた善美の人論の原点・骨格は知-徳(アレテー)であった。これは人間(性)に関する普遍的原理とされ、これはまた、フロムのいう人間性の普遍的性質・性格のものともいえよう。

3. 全一的人間の形成-リードの提起するもの

リード(H.Read)は現代社会の特質である産業主義・商業主義・官僚主義的性格からくる(善き自然主義に反する)非人格性・非人間性の文明・人間を、痛烈に批判した。善き・美しき自然性と合致する人間性教育を統一のあるいは全一的人間の形成の教育と呼び、このための人間教育を芸術による教育として主張し、またこれが人間的で平和を愛する人間性教育であると主張する。

イギリスの芸術・社会・教育・文明批評の思想家リード(H.Read)は全一的人間の形成の視点を、「芸術の草の根」([The Grass Roots of Art])「アイコンとイデア」([Icon and Idea])「芸術による教育」([Education Through Art])「平和のための教育」([Education For Peace])など多くの著作で提示した。彼はプラトン(Platon)、ルソー(J.J.Rousseau)、マルクス(K.Marx)、ヘルバルト(F.Herbert)など多くの哲学・社会思想・教育思想を克明に検討しつつ彼独自の人間論を展開したのである。現代の物質文明に浸された産業主義、商業主義、科学・技術主義、官僚主義などから生起する画一的人間性にきびしい批判を展開し、人間らしさの目標とし

ての全一的人間形成の思想を主張しているのである。

彼は現代人の多くに人間疎外を観ている。そしてその疎外の基本的理由を現代の社会や文化・機械文明・商業主義・官僚的システム等であると分析している。そして現代の政治や経済、文化や教育その他文明全体への批判、そのプロテストとして「芸術の草の根」を著し、自然性の問題・精神の問題・教育・自由の問題などを社会組織や制度、文化の諸問題に関連させて深く思想している。

こうした観点からリードは現代文明の本質である、先にふれた、物質文明に侵された非・反自然主義的性格を批判し、現代文明は現実的な非人間的特質をつくりあげているときびしく批判するのである。

リードは本当の人間教育のためには自然本性の教育、教育の自由が必要だとする。自然本性の型を教える、受け入れる、適応することの習慣をうけいなければならないとする。なぜなら科学も芸術も自然本性の法則、表現型の発見、解釈、説明、表現なのであるからである。

もともと人間は自由に生まれついているのに、あらゆるところで、人間は心の鎖でつながれている。ノイローゼ、犯罪、狂気—これらはわれわれの社会形態の基礎となっている無秩序の多くの兆候にすぎない。教育に自由を、学校に自治を、産業に自己管理を要求することは、なんらかの漠然とした解放の理想によって鼓舞されることではない。我々が求めるのは、国家や教会によってなされるいかなるものよりも、形式の整った、不変の鍛錬であり、モラルである。我々の法則は自然本性の中に与えられているのであり科学的方法により発見しうるものである¹⁰⁾。リードは教育における自然の形、自然の法則を主張する。そして子どもの素質や諸能力の発展において、子どもの感受性や知性などを切りはなし、またそうしたことの訓練によって分裂した人間を形成してはならない。教育は自然な発達の方角において自然な完成の形態へとむかわせなければならないという。そして彼はルソーの自然主義教育、「エミール」教育の諸原理—自然主義・連続発展・実物主義・実体主義などの理論を主張しているのである¹¹⁾。

芸術の本質は個性化であり、調和と全体性・全一性を表すものである。そして芸術活動は人間の内部的諸活動と深くからまっている。ここにこそ全一的人間形成への視点が求められる。

芸術は人間的自由とその精神、創造、人格の所産である。芸術活動は全一的人間形成への重要な視点である。

リードは戦争よりも一層幻滅的な事実—すなわち不正と残酷と無感覚からの人間の脱出を主張した¹²⁾。芸術による自由と創造は退廃と破壊、矛盾と混沌、残酷や無感覚からの脱却を意味している。そして精神の統一と調和へと向かう人間精神の回復を意味しているのである。また人間の知性と感受性を分裂させ、分裂した人間形成への歯止めを警告を示している。まさにこのことは美しい(善美な)人論への重要な一視点である。すぐれた芸術は探求と発見と創造的精神を有している。リードは我々が芸術に求めているのは探求や発見や洞察である。その結果として美を享受し、真実を見出し真の人間的精神を求める。芸術こそが人間を完全に人間らしくするものと主張する¹³⁾。

リードは、子どもへの真の芸術教育は子どもの自由と、彼—彼女のすべての素質と才能の開花と幸福へのパスポートであるといい、人間における芸術訓練は人間の感覚が直感的に求めないではいられない形式と調和と比例と全一性あるいは全体性の訓練であると主張するのである。またこうした訓練は人間の本性に合っている¹⁴⁾。芸術教育はまさしく人間的教育の基点になるものと論じているのである。

4. <新しい人間>論—心的核心としての<内的統合>

フロムは人間存在論としての中心的著書である—美しい(善美な)人論考として—「生きるということ」([To have or to be?])「反抗と自由」([On Disobedience])「革命的人間」([Dogma of Christ])などを著し、現代の人間形成、人間変革の課題として“革命的人間”“新しい人間”を主張している。

フロムは、19世紀の問題は<神が死んだ>ということにあり、20世紀の問題は<人間が死んだ>ということにあると主張する。19世紀において非人間的ということは冷酷であることを意味したが、20世紀においてはそれは分裂的自己疎外を意味しているという。フロムは人間は人間としての自己感をとりもどさなければならないと主張する。仕事に意味を満ちし、人間的な具体的活動をなし得るようになること、愛や真理、正義などの精神的価値が真の自分の究極の関心となるような次元にまで到達していくことが望まれているという。

こうした視点からフロムは<革命的人間>を論ずる。この革命的人間における<革命的 성격>とは従来の政治心理学的概念を超えた心理学的な力動的概念であるとい

う。この革命的な性格とは、なにより人間としての内面的な<独立><自由>であるということ。このタイプの性格・人間は物事を客観的、合理的に観る、判断する、その勇気を持つということ。そして権威や権威を持つ人間に跪いたり、または無力の下の人間に共生的な愛着を持って付和雷同的に同調したりすることはしない。

革命的な性格の人間はなによりも<人間性>と一体化している。彼一彼女は自分の置かれている社会の文化や習慣、偏狭さに囚われない目覚めた性格の人間である。また彼一彼女は<批判的マインドー精神>の所有者で、ただ決まり切った文句、習慣、常識、無意味な繰り返し、惰性等にたいしては確固とした疑いと批判を持つ人間である。これは正しいこと、必要なことにおいてはあらゆる困難を怖れずに<否>と言い得る人間のことを意味している。

革命的な人間とはあらゆる人間性を自分自身のうちに体験している。非人間的なもの、非人間的なことは彼一彼女には関係がない。彼一彼女はよい意味で本質的な人間主義者なのである。彼一彼女は人生を愛し、畏敬する。またあらゆることに懐疑する心驚き人でもある¹⁵⁾。

フロムはこうした革命的な人間を基点に据えたヒューマニスティックな人間として<新しい人間>を論ずる。そして彼はヒューマニズムと人間の勝利への道としてこれらのことを論じているのである。

この<新しい人間>は人間的に、適切に個性・能力・才能・資質などの発揮と人間性十分に存在(to be)する。このためには、あらゆること—すなわちお金、名誉、地位、資産、物、財産などへの過度の執着に囚われる(to have)形態を進んで放棄する。自分が<いま>ここに十分に個性・能力など人間的諸力を発揮し、存在する。生命のあらゆる<現れ>への愛と尊敬。性格・心理的タイプとして諸悪の根源であるナルシズムを脱却する。豊かな想像力を発展させ、現実の可能性を予測する。自分を知っている。自然に対する理解と協力。悪と破壊性とは、成長の失敗の必然の結果であることを知る。そして常に成長する生の過程に幸福を見出すことなどを中心に21の視点から<新しい人間>が論じられているのである¹⁶⁾。

フロムはこうした<新しい人間>と関連して人間存在のためのクレド(信条)を明らかにしている¹⁷⁾。そこでは人間の存在・自由・理性・人間性・教育などの諸課題があらゆる視点から生産的に提起されているのである。

人間は<人生>を見出し、その目標を実行することの意味を見出し得る存在であること。人間は人間的に生きるために、自由を拡大し、死へと導かれる条件に対抗して、生に向かう条件を強化すること。ここでの生—死は単なる生物学的なものではなく、存在し、世界に関わり合うその<情況>を意味する。人間的な生とは、常に変化し、常に新しく生まれることを意味する。死とはその反対に成長の途絶、化石化、反復を意味しているのである。人間が生き、成長するとは、常に誕生し続け、常に覚醒することにあるという、まさに人間らしく善美に生きることを意味している。

また人間とは、そもそも自己の自由性・個性また社会的統合性からの人格統合を求め、また必要としている存在である。このことをメイ(R. May)は哲学、心理学的視点から深く論じた¹⁸⁾。

彼は人間らしく生きる人間の理想的資質として、自由・責任・勇気・愛・内面的誠実をあげ、それを形成していくことが必要であり、求められているという。

哲学・心理学・精神分析的考察を展開してきたメイは人間・人間性・人間存在の質を考える。彼は人間の深層体験としての美や芸術の持つ意味・性格・役割を決定的に重視するのである。

彼は、人間における美の感覚、その存在感、美の実存性、人間における美の創造と自己変革、人間精神の発展などを広く深く論じている。この美なるものは人間の心情と精神中に奥深く入り込むものであって、人間における感情、洞察、感覚的体験を鋭くし、豊かにしていくものであるとしているのである¹⁹⁾。

メイはこうした視点から人間の存在やそれに関わる性格・態度・行為・思想などを多くの著作で体系的に分析論述している。「失われし自己を求めて」([Man's Search for Himself])「真実への勇気」([The Courage to Create])「存在の発見」([The Discovery of Being: Writing in Existential Psychology])「美は世界を救う」([My Quest for Beauty])などにおいてである。

さてこのメイは自己が本当の人間になるための感じ方、経験の仕方、欲求のあり方を学ぶことが必要だという。彼は人間の発達と全生涯はより高度・上質な能力・技能などへの分化の過程であるという。本当の人間、自己を確立するためには意味のある、価値のある精神的拠り所となる心的核心を持つこと。そのためには本当の自己—内面的統合を確立することが必要である。本当の自己の

素質・能力・才能・適性への気づき・発見が必要である。自己の良心への謙虚で誠実な態度。そのことへの深いレベルの洞察・倫理感覚の能力の確立である。内なる知恵と経験の拡がりとは深化である。

本当の自己の確立—内的統合のためには、自分にふりかかるあらゆる困難を乗り越えるための基本的徳としての勇気が必要とする。これは自己の存在への闘いである。本当に人間らしい自己の内的統合への闘いがまさしく存在への闘いなのである²⁰⁾。

エピローグ

本来的に美しい(善美な)ことは知—徳—善ということに密接に関わっていた。このことから伝統的に、真・善・美、正・邪・善・悪といった内面的価値規範が求め続けられてきたのである。ギリシャ哲学・思想の基底では、あらゆることを適正な関係の中で深慮する知、すぐれた考慮こそが真性な知性であるとされたのであった。そしてその知は徳の原点に支えられる性格のものであり、最高の知は美しいものとして捉えられていたのであった。

さて、現在の世界では、多様で変化きわまりない政治・経済・産業・文化・社会とそこでの人間活動・行為はあらゆるものが複雑怪奇な世界にさえなっている。21世紀的現代のいま、社会的領域のいたるところで構造改革、競争・市場自由化、高度情報化社会、金融と産業、地方分権と規制緩和など、そしてあらゆることの基点にグローバル化がある。しかし改革の進行の裏表には、そのために生起している危険があり、いわば改革と危機が同時進行している状況にある。

この現在の改革・危機のもたらしているシリアスな側面は結果的に社会・文化的基盤の解体へと連なる。社会の各分野—国と地方、産業構造—大企業と中小企業、銀行・金融資本と企業、各レベルの学校格差とエリート主義の高揚、各種社会制度(年金制度に顕著に現れているような各種法制の矛盾)と個人の自己責任還元論などなどに観る多面的分裂である。さらにシリアスな問題は社会階層の格差、家族制度、人間関係、公私に亘る生活の重圧などが、構造的課題として広く浸透している。こうしたすべてに亘る基本的課題には政治・経済・産業・文化・教育などのあらゆる営みの—担い手(特にあらゆる分野のリーダーを中心として)としての人間・人間性・人間の能力の質そのものがあり、いろいろな側面からそのことが問われているのである。

いま、なぜ美しい(善美な)人論か。あらゆる営みの担い手としての人間・人間性・人間能力の質が問われるのか。先にふれたように、いまの、現代の状況的特質は改革と危機の同時進行とダブルバインドの性格にある。基本的社会法制・政治・経済・産業・文化・教育・学校・家族などはグローバル化、新自由主義、新保守主義のイデオロギー的特質のなかで自由、競争、市場原理、能力主義、差別と排除、制度責任より自己責任、ポピュリズム的教育・学校批判、人間関係・家族制度の危機—崩壊などにその危機的特質が顕著に現れている。そして社会や国民にとって避けがたい重要な課題としての人権・平和・民主主義への公共的原理はお題的なものに変容してしまい、その内実がまさに崩れようとしている。現実には、社会的諸々が経済性・経済効率・経済的収益至上主義的原理に選択されてしまっている。その結果、あらゆる改革の基点としての人間のための改革・改善の道への選択肢とは何か、ということが根本的に問われている現況にある。

こうした改革・危機とリンクして現れている退廃現象—社会各分野に現れている政治・行政・経済・企業・教育・学校などに観る構造的モラルハザードともいうべき倫理的退廃現象にどう対処するか。シリアスな課題である。この退廃現象のよって来る体質・本質に迫り、これらの克服の課題に取り組むことは容易ではないが、しかしこの社会各分野を覆っている現代のモラルハザードのよってこることへの分析・批判・克服への手だてをなお構築していくことが必要なのである。

ここでは人間の心意の改造—すなわち人間性・人格形成の課題としての哲学・心理・教育の問題としての取り組みにふれておきたい。こうしたことの取り組みは、迂遠ではあるが、求められている避けられない基本的、根源的な取り組みなのである。

モラルハザードを寄せ付けぬ、確固としての人間性—人格、哲学—思想、精神—心理の形成は、子ども時からの知—徳—勇気—公正感(観)への人格—教養—倫理、情操(真・善・美に亘る)—価値・規範—世界観づくりをどう再構築できるかにある。

現代の学校の基本原理は受験体制教育・エリート志向型、経済産業奉仕型、ポピュリズムの迎合主義、能力ふるい分けのゲートキーパー型などから派生する競争・偏差値・知識主義偏重の教育体制になってしまっている。

こうした現実の教育・学校に抗する—個性尊重・人間

としての個人の人権・人格の尊厳を軸とする人間性一人格形成重視の教育は学校の人間化への再構築を要求している。

これは

ア、共生・共存・共栄の思想・哲学

――カリキュラム・教育のプロセス・方法

イ、学習の方法は学習者の手に

――教育の内容・方法・形態・様式

ウ、個性豊かな創造的人間

――思考・発見・創造

などの要請である。

教育・学校の人間化論を検討したNEA(全米教育協会)では、教育の人間化のために教育界の状況を分析し、カリキュラムの基準をつかった。それへの対応としてのカリキュラム開発の論点は社会的実験のカリキュラム・一般教育としての教科・社会のための社会化・自己の覚醒のカリキュラム・文学と美術を中心に据える・学習の方法を学習者の手に・教授形態多様化などに置き、それぞれ検討したのである。このことを「人間中心の教育課程」としたのである。これは教育・学校の人間化への重要・必須な志向であった。

さて人間のあらゆる営みは善きにつけ悪きにつけ結局は人間自身に還ってくる。人間が共に平和で健康に生き続けようと願うなら、人間・社会の営みのあらゆる知・知識・技術・組織などには一特に現代のように核、サイバネティックスなどに代表される怖るべきエネルギー、力を獲てしまった以上一真に人間の顔を持つ政治・経済・産業・学校・教育などの基本的性格、役割を持つことが根源的に要請されているというべきであろう。

人間は人間本性からくる原初的矛盾一野生と神性、欲望と抑制、善と悪、正と邪などの自己自身の闘いは現代においてはますますシリアスなものになってしまっている。

人間は個、集団、社会、国家などにおいてそれぞれの美名の名において絶え間ない抗争・闘(戦)いの歴史を持ってきている。いわばこうした煉獄の世界ともいべき世界から一歩でも脱け出す営みを、まさに、新しい人間変革への一歩として「希望の革命」への取り組みが、個人的、組織的に望まれている現状だといえよう。

こうした観点から、すくなくとも人間・人格形成の基本的拠点ともいえる学校では一教育の内容、方法、評価などの視点から人間性教育重視の学校の人間化論に取り

組むことが本質的に要請されているといえよう。そしてこれからの美しい(善美な)人論を今後の社会的展開・変容のなかで、いろいろな角度からきびしい議論を進め、そして実践・展開・発展させていくことを時代は求めている。

なお余談ではあるが、本稿のモチーフに関連して「プロタゴラス」(プラトン-Platon, 岩波文庫)「希望の革命」(フロム-E.Fromm, 紀伊国屋書店)「若くて美しくなったソクラテス」(林竹二, 田畑書店)「教えるということ・学ぶということ」(林竹二, 国土社)「Choix De Poèmes(アラゴン詩集)」(アラゴン-L.Aragon, 飯塚書店)「素にして野だが卑ではない」(城山三郎, 文春文庫)などを読むと、また身につまされる。

注

- 1) J.J.Rousseau「人間の不平等の起源と根拠についての論文」(ルソー全集第4巻)
- 2) J.J.Rousseau[Discours Sur L'origine de L'ineg - lite Parmi Les Hommes]邦訳「人間不平等起源論」序文 4巻)
- 3) E.Fromm[On Disobedience and Other Essay] New York: Seabury Press
- 4) Platon(藤沢令夫訳)「プロタゴラス」岩波新書
- 5) 廣川洋一「ギリシャ人の教育」岩波新書
- 6) Platon(久保勉訳)「ソクラテスの弁明」岩波文庫
- 7) Platon(藤沢令夫訳)「国家」岩波文庫
- 8) 同上
- 9) 同5)
- 10) H.Read[The Redemption of The Robot] Faber & Faber, The Great Series
- 11) 同9)
- 12) H.Read[Education Through Art]Pearn Polilinger and Higham, Ltd.
- 13) H.Read[The Grass Roots of Art] Wittenborn, Schultz, Inc.
- 14) H.Read(周郷 博訳)[Education for Peace] 邦訳「平和のための教育」岩波書店一<現代叢書>
- 15) E.Fromm[Dogma of Christ] Rinehart and Winston,
- 16) 同14)

- 17) E.Fromm(坂本, 志貴訳) [Beyond the Chains of Illusion] 「疑惑と行動—マルクスとフロイドとわたし」 東京創元社
- 18) R.May [Man's Search for Himself] W,W,Norton Company
- 19) R.May [My quest for Beauty] Saybrook Publishers, Dallas, Texas
- 20) R.May [The Discovery of Being: Writing in Existential Psychology] W,W,Norton Company
9. 同 [The Sane Society] Rinehart & Winston, New York
10. 同 [Man for Himself] Holt, Rinehart & Winston, Inc
11. 同 [The Heart of Man] Harper & Row Publisher
12. 同 [To Have or To be?] Harper & Row Publisher
13. 同 [For The Love of Life] The Free Press
14. R.May [Psychology and Human Dilemma] W.W.Norton & Company
15. 同 [Man's Search for Himself] W.W.Norton Company
16. 同 [The Meaning of Anxiety] Washington Square Press
17. H,Read [Education Through Art] Pean Polilinger and Higham , Ltd
18. 同 [Grass Roots of Art] Wittenborn Schultz, Inc
19. 同 [The Redemption of The Robot] Faber & Faber ,The great Series
20. 全米教育協会 (伊東博訳) 「人間中心の教育課程」 明治図書

参考文献

1. プラトン(久保勉訳)「饗宴」岩波文庫
2. プラトン(藤沢令夫訳)「国家」上 岩波文庫
3. 同 上 下
4. プラトン(久保勉訳)「ソクラテスの弁明・クリトン」岩波文庫
5. デイオゲネス他(加来彰俊訳)「ギリシャ哲学者列伝」全三冊岩波文庫
6. 荻野弘之「哲学の饗宴」NHKライブラリー
7. ルソー全集全14巻白水社
8. E.Fromm [The Revolution Of Hope] Harper & Row Pblisher

9. 同 [The Sane Society] Rinehart & Winston, New York
10. 同 [Man for Himself] Holt, Rinehart & Winston, Inc
11. 同 [The Heart of Man] Harper & Row Publisher
12. 同 [To Have or To be?] Harper & Row Publisher
13. 同 [For The Love of Life] The Free Press
14. R.May [Psychology and Human Dilemma] W.W.Norton & Company
15. 同 [Man's Search for Himself] W.W.Norton Company
16. 同 [The Meaning of Anxiety] Washington Square Press
17. H,Read [Education Through Art] Pean Polilinger and Higham , Ltd
18. 同 [Grass Roots of Art] Wittenborn Schultz, Inc
19. 同 [The Redemption of The Robot] Faber & Faber ,The great Series
20. 全米教育協会 (伊東博訳) 「人間中心の教育課程」 明治図書

他

Summary

This is the Paper of a theory of good and beautiful man. Ancient Greek had had the special culture education - so called "Paideia". The education of "Paideia" had liberal arts subjects and meant the education of intelligence and virtue.

Protagoras, Socrates and Platon's Philosophy in ancient Greek was excellent and great. Their Philosophy and thoughts of intelligence and virtue of "Paideia" had a great influence on the posterity. Platon says a high degree intelligence is beautiful and a beautiful intelligence has always virtue.

Now it is said that we Japan is in so many kind of moral-hazard in various field of social life. So we should have the education of a good and beautiful, intelligence and virtue beyond the all kind of moral hazard.

The Author researched on the theory of good and beautiful man on the thought of E.Fromm and his view of human nature, H.Read and his education through art on this paper.